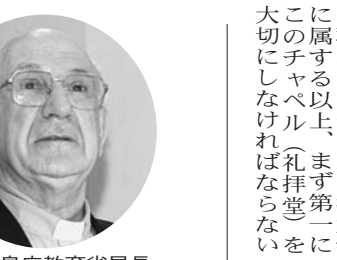
東北学院大学特別講演会

「人間形成とキリスト教大学」（要旨）

六月二十八日に「人間形成とキリスト教大学」と題し、ローマ教皇庁教育省局長のヨゼフ・ピタウ大司教を招き特別講演会を開催しました。本号では講演の要旨についてご紹介いたします。



ローマ教皇庁教育省局長
ヨゼフ・ピタウ大司教

《略歴》1928年イタリア・サルディニア島カリアリ生まれ。スペイン・バルセロナ大学で哲学を修学（1952）。上智大学で神学を修学（1960）。米国・ハーバード大学で政治学博士号取得（1963）。上智大学法学部政治学教授を経て、上智大学学長（1968～1981）。教皇庁立科学アカデミー・社会科学アカデミー会長（1997～1998）など要職を歴任。1998年から現職およびサルディニアのカストロ大司教。

―人間形成における大学教育と家庭教育（親の教育）―

人間形成は一つの過程です。一日で終わるものではなく、一生かかるものです。その中でキリスト教大学で学ぶ者たちに、私たちはその人間形成の過程にどう影響を与えたらいいでしょうか。まず第一に申し上げなければならないのは、大学はただ既知的な、学問的な教育だけを与えるものではありません。もう一つは、ただ私たち大学に属する者だけがその役者である、あるいは関係し、責任を持つものではありません。親の責任が一番大切です。小学校、中学校、高等学校、大学でも親の責任が一番大きな責任です。親がいなければ、あるいは分裂された家庭だったら、ある場合には大学で、あるいは学校ではほとんど何もできません。私たちは何か神様のように、何でもできるということを考えたら大間違いです。

私たちはキリスト教大学に属する以上、まず第一にこのチャペル（礼拝堂）を大切にしなければならないと思います。チャペルは、キリスト教大学であるという象徴です。それはカトリック大学でもプロテスタント大学でも全く同じで、キャンパスの中心はチャペルでなければなりません。できるならば、美術的にもこのチャペルが大学全体の中で一番美しいものでなければなりません。チャペルは、教職員たちが、まず第一にその必要性、大切さを感じ、それを学生たちに伝えなければならないのです。チャペルへ行っても先生方が見られない、あるいはほとんどの学生たちが来なければ、チャペルは本当に重要なものではないという印象を与えてしまいます。

私が上智大学の学長だった当時、毎週必ず金曜日にミサ（礼拝）を行いました。二百人ぐらいの学生たちが来たでしょうか。毎週必ず同じ御堂で行い、みんな同じ心を持っているということを示したかったのです。また、水曜日の昼休みには学長室でも行いました。自由に来たい学生たちがキリスト教について話し合いました。キリスト教大学ですから無理強いはしませんが、学長はじめ、できるだけみんなが参加するように呼びかけました。これはこの御堂、チャペルが大学の中心であるということを認識しているか？　その証（印）を見たかったのです。チャペルは目で見える大きな印です。しかしその精神も見せなければなりません。だから、私たちはここで祈ります。このことはキリスト教大学であるということを示しています。

親の責任・役割は重大ですが、二番目に重大なことは先生方と職員です。日本ですから、先生方と職員全員がキリスト教徒である必要はありません。無理やり信仰を強制するならば、大きな問題が起こり得るかもしれません。しかし、教職員の一つの中心部分（中枢）ではそうでなければなりません。キリスト教大学では要職につく先生方のうちに、キリスト教徒である方がほとんどいなければ、どのようにしてキリスト教の精神を守ることができるでしょうか、このことは真剣に考えなければなりません。

すべての教職員がキリスト教の信徒でなければキリスト教大学はあり得ない、ということではないのです。一つの中心的なコアは必要です。その方々は学問的にも選ばれた人々でなければなりませんし、もう一つ、自分の信仰と自分の生き方との一致が必要です。キリスト教大学の先生で、主にこの信仰を持っている先生方は学問的にも優れている上に、自分の生き方と信仰、自分の学問とが一致し、他の模範でなければなりません。いい学者、いい人、いいキリスト教の信徒、いい証人（あかしびと）でなければならないのです。口で教えることばかりでなく、自らの人生で教えなければなりません。

『先生』という名前、私は大好きです。その二つの漢字、もちろん先に生まれて、それで経験があって教える。それが普通の読み方でしょう。しかし、他の読み方、変わった読み方があるのではないでしょうか？　先に「先に生きる」こと。先に自分の人生をもって、自分の生き方を教える。そのような先生方が一つのキリスト教大学では必要です。

大学では職員たちも本当にすばらしい教育者です。大学紛争の時代では先生方はほとんど何も言う勇気がありませんでした。その当時であっても、職員の皆さんは勇気をもって学生たちを注意することもできたのです。また、温かく彼らに話していろいろなことを教えてくださったのです。私は毎朝、事務所に行く前に、必ず職員の部屋に立ち寄り感謝の声をかけました。皆さんはこの大学を支える土台でした。先生方はもちろん、親ももちろん、しかし、職員も同じ気持ちになって、同じように学生たちを、自分たちの仕事の中で、自分の生き方で導くことができるのです。

―キリスト教大学のイメージ「創造・エクソダス・十字架・復活」の四つのキーワード―

キリスト教大学は共同体をつくらなければなりません。ユニバーシティーというのですが、みんなが一つの目的に向かって一致する。そしてキリスト教大学ですから、信徒にならなくても同じ心を持つことで、大学をキリスト教大学として守らなければなりません。

キリスト教大学の特徴は何であるか。私は愛を中心にとらえたいのです。十六世紀の半ばあたり、キリスト教の最初の宣教師たちが日本に渡来したときに、聖書に出てくるこの愛の言葉を日本語にどう訳せばいいか、すごく迷い、とうとう一つの言い回しを見つけ、『大切にする』という言葉に訳したのです。

『大切にする』―キリスト教大学はまず第一に先生方、職員、学生を『大切にする』目的を持たなければなりません。一人ひとりの教職員は神から贈られた宝物です。それぞれを大切にしなければなりません。『大切にする』ということの実践は、まずお互いにあいさつすることから始めましょう。他大学の先生方が上智大学に来たときに『いや、こちらは何か特別な雰囲気がある』とよく言われたのですが、今思えばお互いにみんなが『あいさつ』し合うことだったのではないかと思います。そのキリスト教大学としての雰囲気の原点は、キリスト教の『創造』の奥義から始まるのです。

―「創造」の奥義とは―

すべては神からつくられたものです。みんな宝物です。そしてみんな平等です。人種差別も性差別もやってはいけない。本当に私たちが大学にいて互いに交わる、まず第一に考えるのは、彼も彼女も神からつくられたもので、互いを大切にしなければならない。その基本的な信仰が中心でなければなりません。その基本的な信条、奥義を信じるならば、もう差別はあり得ない。

みなさんは、毎日よりよい人間になるための努力をしなければなりません。絶対的なものはたったお一人、ただ神だけです。お互いの欠点を見て、お互いに助け合いよりよい者になるように先生方も毎日深い研究をしなければなりません。絶対者はみんなだけ神だけです。そしてはみんなが相対的なものです。まず第一に学問の発展、学問の進歩の真理を見せなければなりません。自分の欠点を直し他人をも、よりよい人間になるために助けなければならないのです。キリスト教大学であるならば、毎日改革しなければなりません。大学としての根本的な方針の決定に従うばかりではなく、日々の行いの中で、みなさん一人ひとりが、いつもどこかでさまざまな欠点を見つけて欠点を直す努力を怠らないことが、本当のキリスト教大学になるのです。

上智大学ともう一つはローマにある教皇立国際大学グレゴリアン大学との経験です。そこの学長になったときに、学長室の前にボックスを置き、学生たちにアピールして、改善すべき点をボックスに投函するようにしたのです。毎週四つ、五つぐらいの改善要望などがありました。ある時に小さな要望を受け入れて、改善したら学生たちもすごく喜んでくれたのです。

よくなりたい、よくしたい。私たちの大学は一番いい大学であるかもしれません。しかし、人間の集まりの大学です。欠点だらけです。絶えず、よくしなければなりません。そのことは、どのように人を大切にするかにつながります。

―「エクソダス」の奥義―

もう一つ、私が申し上げたい旧約聖書の奥義は『エクソダス（Exodus）』（エジプトから出て自由になるという出エジプトのこと）。一番大切なことは、この長い旅の経験によって、バラバラで奴隷だったユダヤ人が一つの国民になることで、共同体的な意識を育てることにあります。

ある大学は学問的に優れていて、誇りをもってこれはいい大学であるという、そのことも必要でしょう。少なくともある面ではこの大学は、学問的な面では、優れた大学になっている。しかし、それだけではない。共に共同体的な結び付き、一緒の経験によって、私たちはっきりした一つの目的があるのです。

みんな共同の目的があって、それを自分の目的にして、協力しながらこの目的を実現したい。学生たちが四年間このキリスト教大学にいるなかで、はっきりした目的を私たちはどのようにして学生たちに説明して、自分の血と肉にするか。学生たちも徐々に考えや目的を変えて、このような唯一の共同体の目的に入るのです。

このアイデアをどのようにして説明するか。一緒に歩み、奴隷の状態から自由の状態に入ることが、私たちの信仰の一つの土台です。このエクソダスなしでは新約聖書の歩みも一緒に歩くのもわからなかったでしょう。土台は旧約聖書にあるからです。信仰の道を歩むものは一人だけではない、共同体的に歩むべきです。大学も同じことです。キリスト教大学でありたいならば、まず第一に『創造』と『エクソダス』の体験を一緒にしなければならないのです。

―「十字架」の奥義―

三番のイメージは『十字架』です。もちろん十字架はキリストの愛の印です。ご自分の愛の血を私たちのために捧げて、私たちは罪から自由になる。しかし、今、私はこの十字架そのものをキリスト教大学の印として取り上げたいのです。その二つの線、縦の線と横の線。恐らく私たちのキリスト教大学のミッション（使命）は、一つのイメージで当てようとするならば十字架です。まず第一に縦の線。この地と天をつなぐ線、神と人とを結ぶ線。ある意味においてチャペルと同じイメージです。そして横の線は共同体的なつながり、正義の考え方、弱い人を大切にする考え方、政治的な責任、社会的な思いやり、そのようなことを考える横の線。しかし、注意してください。十字架を立てようとするならば、その縦の線をしっかりと土に深く置かないと横の線はそのまま倒れてしまうのです。ある場合には、キリスト教であまりにも正義のことを話し、神様のことを忘れてしまうならば、場合によっては正義だけで過激的な政治や、あるいは社会運動に陥ることもあり得るかもしれません。しかし、縦の線と横の線を一緒にするならばそのような過激なことはあり得ないと思います。

私たちの使命、キリスト教的な大学の使命を定義しようと思うならば、もう一つの奥義・イメージとして『復活』が大切になります。

―「復活」の奥義―

キリスト教大学にほかの大学の先生方や国立大学あるいはキリスト教に基づいていない私学の先生、あるいは学生が入るならば、喜びに満ちた雰囲気を体験しなければなりません。キリスト教大学であるならば、その雰囲気に入ると、すぐに何か明るさ、よき道にぶつからなければなりません。本当の共同体に触れて、そしてその共同体は明るい、キリストは復活され、キリストは私たちを自由にしたことを覚えなければなりません。武器で人間の問題は解決できません。武器は人を殺し、社会を破壊し、問題を解決することはできません。その意味でキリストは二つの対立している国民を一つにするために復活なさり、和解をもたらしました。

このような四つの奥義と言いましょうか、あるいは四つのイメージは、私たちのキリスト教大学の使命を示していると思います。口では簡単にいえますが、その四つのイメージを実現するのは容易ではありません。みんなの協力、毎日の共同体としての助け合いが必要です。私たちは日々そのことを考えないならば、私たちのキリスト教大学の目的に達することはできないのです。

―美的・道徳教育の必要性―

このキリスト教大学のイメージについて話したところで、もう一つ、キリスト教大学で、なければならない一つの要素があります。西洋の文化ではキリスト教を外して考えると、ヨーロッパ全体の八十％の美術はなくなってしまうのです。キリスト教大学に入るならば、チャペルでも、図書館でもいいし、ほかのところでも何か美的な教育を与えるところが必要です。美のないところでは、その三つの大切なことはなくなってしまいます。

大学は客観的に何がいいか悪いか、それを見つけるために学生たちにある基準を与えなければなりません。主観的なことだけではありません。今こう感じるのだからこれをやっていい、あとは好きではないからこれはやってはいけない。それだけで道徳観念を決定することはできない。そしてキリスト教大学では、主に宗教の時間や倫理を教えるとか、客観的なもの、判断できるような基準を与えるべきです。家族の問題、生命の問題、政治的な責任の問題など、東北学院大学として何か正しい基準を与えているのでしょうか。

いつかBBC放送の番組で、一人のイギリスの女性にこういう質問がありました。グレゴリアン大学だったのですが『あなたはこの大学で勉強していますが何を感じますか』という問いに彼女は、『大学で感じるということではなく、考えることです』と答えました。私たちはどのような考え方を育てたいのか。そして主に道徳感をどう育てたいか、キリスト教的な道徳感。そこまで私たちは突き詰めて行かなければなりません。道徳感も同時に育てる。個人の道徳感、家庭の道徳感、社会、政治、国際関係の道徳感を育てることが必要です。

この間、私たちはイラクの戦争の問題にぶつかりました。いろいろな複雑な問題です。ローマ法王は、最初からはっきりと『武器をもってこのような複雑な問題を解決することはできない』と、彼は一貫した考え方を打ち出しました。戦争が終わってからも主要問題はまだ未解決です。現代では武器をもって国連なしで介入すると解決はあり得ません。私たちはその線を打ち出すためにいろいろなことを勉強しなければなりません。そしていろいろな問題を見なければならない、複雑な問題ですから。

このことを通じて、私はキリスト教大学のイメージを描きたかったのですが、これはなかなか難しいものです。みんな協力するならば、私たちはこのキリスト教大学のミッション（使命）を実現することができるのです。

―上智大学で出会った三つの「こころ」―

上智大学の学長になった日に、私の机の上に日本語で書かれた短い一つの文章がありました。誰がそれを書いたのか今でもわかりません。こういう言葉でした。『教育とは、捧げる心、思いやる心、ほほ笑む心からあふれ出る』。学長としてその三つの心を大切にしたかったのですが、それをできたかどうかわかりません。『捧げる心』とは犠牲を意味します。親、先生、教育者は、子供や生徒が成長し隠れた才能のすべてを引き出すのを助けるため、自分の人生を差し出し、捧げ、犠牲にする人でなければなりません。私たちは皆、まず第一にこの教育者として捧げる心を持たなければなりません。

第二に『思いやる』とは英語や西洋の言葉には、なか訳しにくく、同情、共感を覚えることを意味します。子供や生徒、学生が自分の要求を実際に表明するまえであっても、親や先生は深い思慮深さをもって、そこから来るある意味の直観によって要求を酌み取り、それに答えるのです。『思いやる』とはその思慮深さと感情の双方を含む概念です。大学の先生、また大学の経営者、学生、その間のほとんど同一化に等しいものがあって、そこからその要求にこたえるのです。

『ほほ笑む』とは英語のスマイル。親や教育者はほほ笑む心を持たなければなりません。ほほ笑みは幸せ、平和、落ち着き、希望、発展を意味します。教育と成長の過程は落ち着きのある陽気な喜び、力づけて励ませを与え、幸福な雰囲気を感じます。ほほ笑む心は学生に物事の肯定的な、幸せな、さらにゆかいな側面を望まなければなりません。ある意味では、ほほ笑む心は『復活』の奥義を表します。

最後に、このような精神的、道徳的なものがあっても、しっかりとした学問の成長がなければいい大学になりません。キリスト教大学になるために、まず第一に大学としての良さが必要です。大学としての悪い大学だったらキリスト教の意味を私たちはまだ理解していないことです。学問的にも、人間的な教育の面でもいい大学であって、初めてキリスト教的な要素の意味があります。さまざまな違った面を統合させて、初めてキリスト教大学と呼べると思います。

〈平成十五年六月二十八日実施の講演会要旨。文責編集部〉